

あすへの考

【文明が生む感染症】

なりました。流行するウイルスを選び出し、パンデミックへと性格づけるのは、その時々、社会のあり方ではないかと。

僕たちの社会にはいつも様々なウイルスが入り込もうとしている。たまたま社会がそれに適した状態になっていると、ウイルスが

最近、実は逆ではないかと考えるように

僕たち研究者はウイルスの種類や特性を調べ、原因を突き止めようとしてきま

流行するの。

なぜある感染症が

人から人へウイルスは感染し、天然痘、ペストなどが、交易や戦争などとともに世界に広がります。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

なぜある感染症が

流行するの。

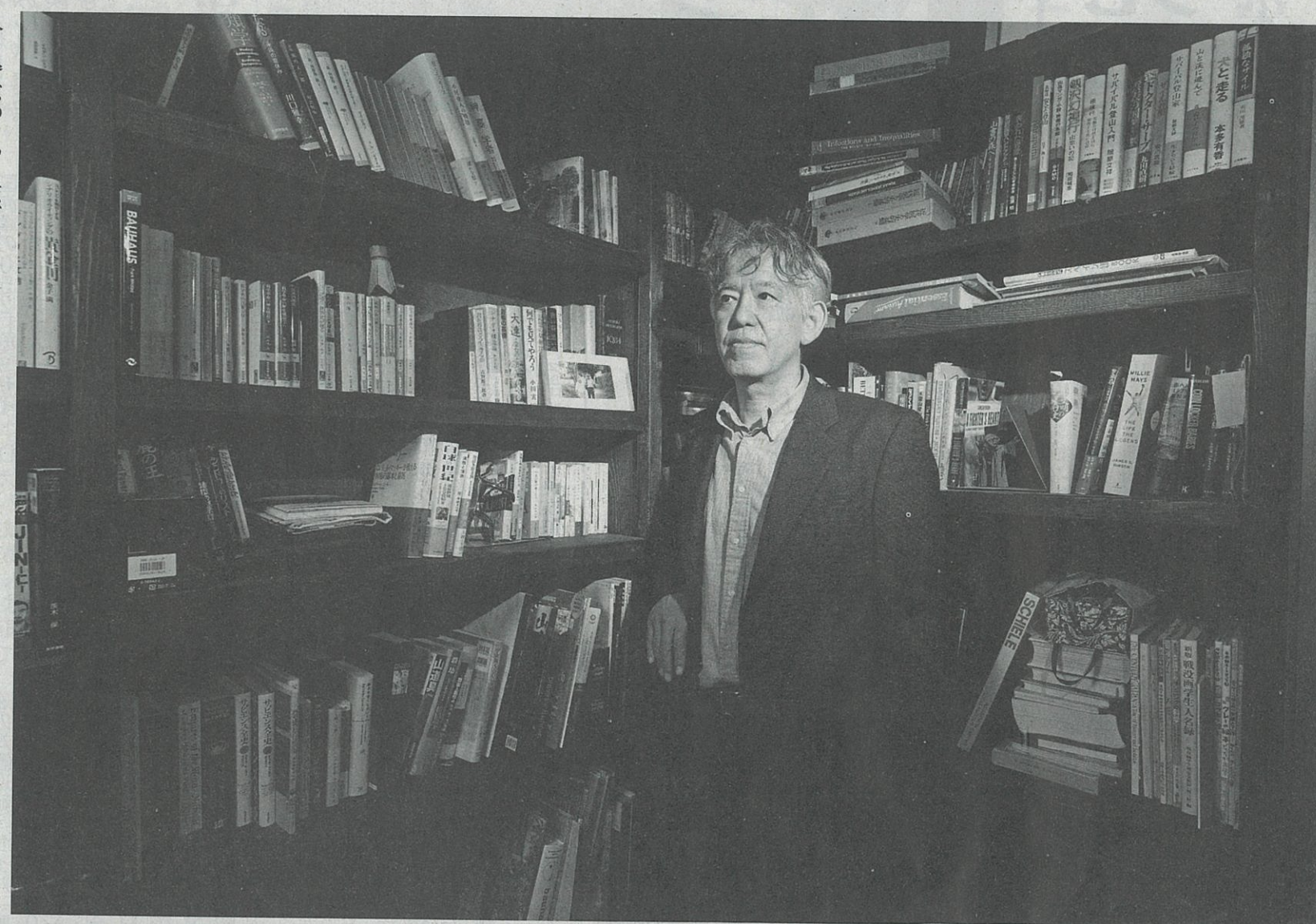
なぜある感染症が

流行するの。

都市に密集し、発達した交通網で、移動・交流する人々

入り込み、わーっと広がっていく。たとえばエイズウイルス(HIV)は、アフリカのチンパンジーに寄生していました。そのチンパンジーを食べた人間が感染します。そして感染を拡大させたのは、植民地政策と近代医学の導入という当時の社会状況です。

植民地での都市作りのためにたくさんの男性労働者が街に集められました。男女の比率がすごくいびつになり、売春が流行します。一方で慈善的な意図から、アフリカの風土病の注射治療も行われました。ただ、注射器は使い回しでした。そうやって感染が広がる土



長崎、東京、途上国でのフィールドワーク、と地球を飛び回る。「グローバル化を含めた社会のあり方がパンデミックを用意する。1万年くらい前のように小さな集団で暮らしていればパンデミックは起きないのだが……」＝東京都内の自宅で、米田育広撮影

コロナ 現代的パンデミック

パンデミック(感染症の世界的な大流行)状態になった新型コロナウイルス。歴史を振り返れば、ペスト、天然痘など、私たちは幾度も感染症の脅威にさらされてきた。感染症の研究や、開発途上国での対策に取り組んでいる長崎大熱帯医学研究所教授の山本太郎さんは、「文明は感染症の揺りかご」と表現する。どういうことか。歴史から引き出せる教訓は何か。山本さんに聞いた。

(編集局 知野恵子)

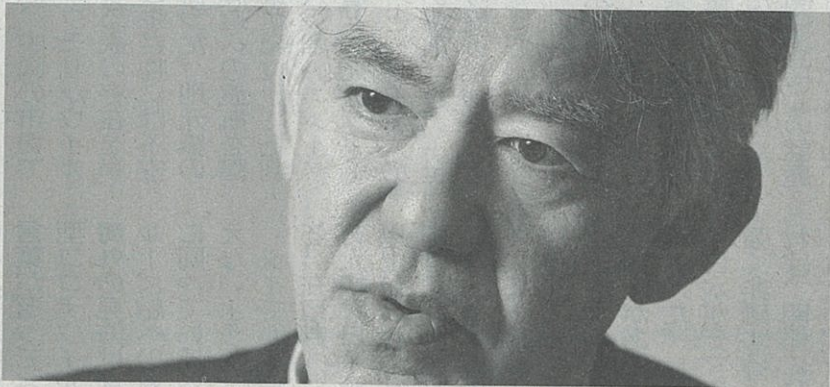
メモ 感染症とは、ウイルスや細菌などの病原体が体内に侵入して増殖し、発熱、下痢、せきなどの症状が出る。ペスト、コレラ、麻疹(はしか)、天然痘、結核、インフルエンザ、エボラ出血熱、エイズ、マラリアなどがある。

長崎大熱帯医学研究所教授

山本太郎氏

やまもと・たろう 医師、中国・大連医大、福建医大客員教授。専門は国際保健学、医療人類学、熱帯感染症学。アフリカ、ハイチなどで感染症対策に従事。京大助教授、外務省国際協力局課長補佐などを経て、2007年から現職。著書に「抗生物質と人間」など。

デジタル時代で初の脅威。不確かな情報が招いた買い占め



うでしょう。都市に人々が密集し、地球の隅々まで交通網が発達し、人々が移動、交流する。ウイルス拡散のスピードも速い。現在の社会のあり方がパンデミックの格好の「揺りかご」になったのでしょうか。

ウイルスや感染症のふるまいは謎に満ちています。その様子は、地球規模のミステリーのようなものです。

ウイルスは動物や人間に寄生しないと生きられません。寄生先の細胞を利用して、自分を複製します。その時に性質が変わったり強毒化したりします。毒が強くなりすぎて、自ら消滅してしまうこともあります。

歴史を見れば、突然流行し、謎のように消えた感染症はたくさんあります。

2003年に流行したSARS（重症急性呼吸器症候群）は、コウモリ、ハクビシンなどに寄生したウイルスが人に感染したとみられています。今は流行が収まったかに見えますが、ウイルスは永遠に消えたのか、どこかで深い眠りについているだけなのか、物語は終わったのか、次の幕が開くのを待っているのか。誰にもわかりません。

ここ50年から100年ぐらいの間に新しいウイルスがどんどん見つかっています。人間がものすごい勢いで地球のあらゆる場所へ進出し、熱帯雨林などを破壊しているためでしょう。

野生動物とウイルスが調和的に過ごしていたところに人間が侵入し、調和を壊す。すると今度はそのウイルスが人間の社会に入り込もうとする。人間とウイルスは作用し合っています。

ただ、悪いことだけではありません。ひとたび感染すると、人間には抵抗力がつかまず。

新型コロナウイルスの感染者の

多くは無症状や軽症のようです。感染者が抗体や免疫を持てば、それ以降は、季節性が散発的な流行がぼつぼつとあるという状態になります。性質が似た新たなウイルスへの防波堤の一つにもなります。それが社会が集団としての免疫を持つということです。

おかしい例えかもしれませんが、映画「七人の侍」のイメージです。野武士の略奪に困窮した村の農民が、7人の侍を雇って野武士と戦います。異質な侍を村に入れば、何が起るかわからない怖さがあります。7人の侍は言わばウイルス。うまく取り込めば、村は外敵に対して強固になる。それと似ています。

人間は様々なウイルスに感染してきました。自然界の中でも感染症のレパートリーをたくさん持つ動物です。そのことが我々を生態系から守ってくれています。いかにウイルスと共存していくか。多様性の確保が重要です。

今回は、ツイッターやフェイスブックなど「SNS」が盛んに使われるデジタル時代初のパンデミックです。

昔と違って、僕たちはパンデミックが起るにつつある、あるいは起る前から、その状況を知ることができるようになりました。

ただ、不確かな情報も多く、情報が社会を動かしているとも感じます。トイレットペーパーなどが一斉に店頭から姿を消したのは、まさにそうした例でしょう。現代的なパンデミックの影響だと思えます。

ペストが流行した中世は病原体という概念も情報もない中、ばたばたと人が死んでいく。目の当たりにした人々はすくすく怖かったでしょう。人口減、感染拡大を防げなかった教会の権威の失墜などが、社会に大変革をもたらします。デジタル時代の特性は、直接人と人が接触しないこと。そういう社会は感染症が生まれにくい。

今回、感染防止のために、在宅勤務を取り入れたり、店舗を閉じたりするなどの方策が取られています。社会はますますその方向に加速されるかもしれません。

気をつけないといけないのは、フェイクニュースという「感染症」がすごい勢いで流行することです。今回、WHOもその状況を「インフォデミック」と呼びました。広がり方はパンデミックと一緒にです。誰と誰がつながっているか、人と人の関わりを映します。

これからはウイルスとの戦いであると同時に情報との戦いです。まさに文明は、感染症の「揺りかご」なのだと思います。